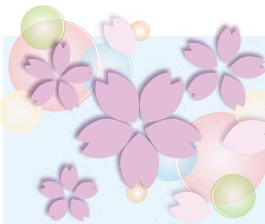


27. 3. 9

佐倉市

教育センターだより Vol.38

平成28年3月9日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043(486)2400 http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/13-6-0-0-0_6.html



情報化社会といわれる今…



佐倉市教育センター所長 真 下 誠

今回は、時代の変化を私体験からお話ししてみたいと思います。私は趣味でオートバイに乗っています。休みのときはちょっと遠出をすることもあります。車を運転していくては、気づかない発見がたくさんあることも魅力になっています。ある時、修理の関係で、どうしてもオートバイの後輪をはずさなければならぬことになりました。以前でしたら取扱説明書をじっくり読み、それも面倒な場合には、店頭に持っていく修理でもらうことがほとんどでした。しかし、インターネットで「オートバイ 後輪のはずし方」と検索したところ数多くのサイトがヒットし、自分の車種のものも見つかり、それを見たところ、動画と丁寧な解説が加えられており、素人の私でもできると感じました。早速、動画をみながら作業を進めていくと、後輪をはずすことができ、無事修理を完了することができました。

また、こんなこともあります。神奈川県のある市に荷物を運び入れることがあり、知人の軽トラックを借りたことがあります。荷物を積み込み、車をスタートさせました。しばらく走ると給油のことが気になり、安全な場所に車を停め、どこに給油口があるのか確認してみるとさっぱりわからないのです。そこで、インターネットで「軽トラック 給油口」と検索したところすぐにその場所がわかり、セルフの給油も無事済ませることができました。

以前でしたら問題を、困ったことを解決するのに人と連絡をとって教えてもらったり、専門店に直接ものを運び込み、事情を説明した上で修理してもらったりすることが常でした。私が学生のころ、自分の求めたい本を探すために神田の本屋街をはしごしたこともありますが、今ではインターネットで注文し、自宅まで届けてくれるサービスもあります。ずいぶんと便利になったものです。

しかしその一方で、人とのかかわりが希薄になり、コミュニケーションの不足が懸念されていること、インターネットの普及による情報化社会は、子どもたちの生活や心身の問題にも大きな影響を及ぼしていること、情報機器やネットに関する適切な活用方法・情報マナーの向上のための取組が求められていることは周知のとおりです。

現在の情報化社会が後退することはないでしょう。よって、インターネットと上手に付き合う方法を考えてみること、距離感を考えてみることが、まずは、何よりも大事なのではないかと思います。読者の皆様もぜひこれを機会に、付き合い方、距離感について考えてみてはいかがでしょうか。

今回の号は、本年1月26日（火）に開催しました「佐倉市教育センター等報告会」の特集を掲載します。本報告会は、教育センターの指導主事が年度当初にテーマを決め、約1年間かけて準備してきたものです。報告会に際しては、「タイムリーなもの・わかりやすく報告・活用できる内容」を合言葉にしてまいりました。読者の皆様のそれぞれのお立場で、本報告会の内容を伝達していただきたり、活用していただいたらえると幸いに思います。なお、第3報告の中の「家庭教育に関する調査」については、設問ごとのデータをグラフ化し、分析と考察を加えたものを佐倉市教育センターのホームページにアップすることにしました。平成19年度の調査で同じような設問を実施している場合は、同様にグラフ化し提供いたします。各種研修会をはじめ、様々な場で本資料を活用していただければ幸いです。

最後になりますが、本年度、センターの事業にご理解・ご協力いただきありがとうございました。佐倉の子どもたちが健やかに成長していくよう、来年度も所員一丸となり、職務遂行に邁進してまいります。

【第1報告】 特別支援教育の推進に向けた校内体制の充実について

各学校において特別支援教育を推進するため、特別支援教育コーディネーターを中心とした校内体制の取組について報告しました。

1 佐倉市教育センターの機能の活用

佐倉市教育センターの発達相談の機能を活用することにより、保護者や学級担任、そして児童生徒本人が抱える困難さの軽減や解消に向けて、担当指導主事と学校教育相談員が一緒に考えていきます。希望に応じて発達診断検査を実施します。また、結果通知については、検査を担当した学校教育相談員が学校に伺います。そして、特別支援教育コーディネーターを中心に、学級担任と保護者が同席の場で検査結果について共通理解を図り、支援方法を考えていくことを提案しています。

2 特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制の充実



〔A児の実態〕（学級担任、保護者からの聞き取り、盲学校からの見解、発達診断検査の結果より）

- 眼振により一点を見続けることが困難である
- 漢字は読むことは得意であるが、書き取りは苦手である ○教科書の飛ばし読みが見られる
- 板書のノート転記が困難である ○聞く能力は高い ○折り鶴が安心アイテム
- 楽しみながら漢字が覚えられる工夫をしていくとよい

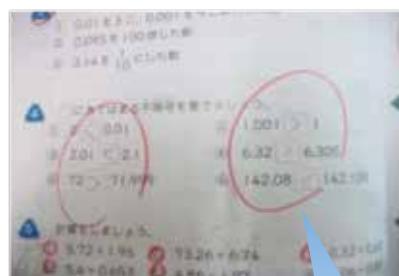
↓
特別支援教育コーディネーターを中心に学校関係者と保護者で支援方法を検討

〔具体的な支援例〕



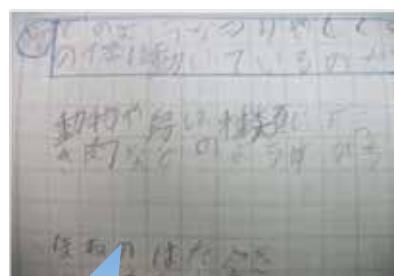
〔落ち着くアイテム〕

机上の脇に折り鶴を置くことで、気持ちが落ち着き、学習に集中できるようになりました。



〔教科書に直接記入〕

書くことの困難さを軽減するため、教科書へ直接答えの記入を許可したことにより、意欲化を図ることができました。



〔聴覚の強さを活用〕

口頭による質疑応答で理解度を確認できれば良いこととし、ノートに書く量を軽減しました。

佐倉市教育センターの発達相談の機能の活用と、特別支援教育コーディネーターを中心とした校内体制の取組により、A児の特性が理解されたことや、実態に応じた支援を通して困難さの軽減や解消が図られた事例の報告となりました。

【第2報告】 インクルーシブ教育システム構築モデル事業について

研究3年目の取組を、代表的な取組のいくつかを紹介しながら3つの視点で報告しました。

1 正しい理解

視覚に困難さのある子供が入学する学校では、その子供が持つ困難さを理解するために、千葉盲学校の先生をお招きして校内研修を行いました。

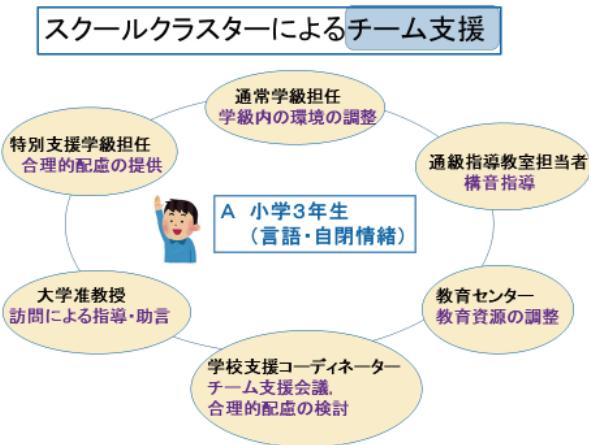
子供が持つ困難さを、周囲の関わる人間が正しく理解することで、初めて「適切な指導と必要な支援」につながります。

障害は今、「社会モデル」で捉えられます。本人が持つ困難さと、周囲の理解や支援の両面から考えることで子供の成長を支援します。



市内小学校での障害理解研修

2 支援のつながり



市内小学校では、言語発達・集団適応などの面で困難さのある子供を支援するために、担任だけではなく、左図のような教育資源が「チーム」で支援を行いました。

具体的には、毎月関係のメンバーで「チーム支援会議」を行い、個別の指導計画をもとに、子供の目標や、必要な手立て、役割を確認しながら支援にあたりました。

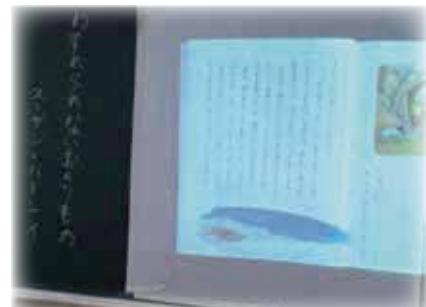
対象の子供に実施した「LD児等の行動兆候チェックリスト」の結果の比較から、1年間で「対人関係・変化への対応・衝動性・多動性・注意」などの項目で大きな伸びが見られました。学校生活に適応する力が備わったのは、適切な支援の成果です。

3 学びの充実

ある小学校では、教師の言葉による指示や発問だけでは、その内容を理解し、学習についていくことが困難な子供がいます。そのクラスでは、授業時に教科書を前方に投影し、今、どこを読んでいるのか、何について考えているのかが視覚的にわかるように、情報及び教材の配置に配慮しています。

これは対象となる子供だけではなく、他の多くの子供にとってもわかりやすく、効果的でした。

この事例にあるように、一人の子供の困難さに対して必要な「合理的配慮」をすることで、他の多くの子供にとっても学びやすい環境につながるというは、「ユニバーサルデザインの授業」と言えます。



授業時に前面に教科書を投影

保護者の方のお話より

報告の中では、身体面で合理的配慮を受けながら市内小学校で生活している子供を持つ保護者の方からお話をいただきました。

先生方が親の思いを理解していただくことで前に進めることがたくさんあったという、実感のこもったお話をいただきました。

センターからのお知らせ

- この研究で作成した「関係リーフレット」が教育センターHPで見られます。研修等でご活用ください。
- 研究で開発した「ことばずかん」は、写真とともに文字の学習ができるソフトです。
S一学校一教育委員会一教育センターインクルーシブ教育研究関係内に保存してありますので多くの学校でご活用ください。

【第3報告】 家庭教育に関する調査から見えた現状と課題について

社会はめまぐるしく変化しており、それに伴い、生活環境も変わってきています。また、それぞれの家庭や個人の価値観も、実に多様化してきていますが、昔から家庭教育は、様々な教育の基盤となっています。平成19年度に小学1年保護者を対象に行った同様の調査と比較しながら、結果の分析及び考察をし、家庭教育について見えてきた現状や課題について報告します。

1 調査目的

- ①佐倉市内の小学1年生と中学1年生の保護者に家庭教育に関する意識調査を行い、乳幼児期からの子育てや家庭教育の実態を把握し、課題を明らかにする。
- ②佐倉市内の中学1年生の学習に対する意欲や取り組み、生活状況、食生活等、学力の背景になる実態を把握し、課題を明らかにする。

2 回収率

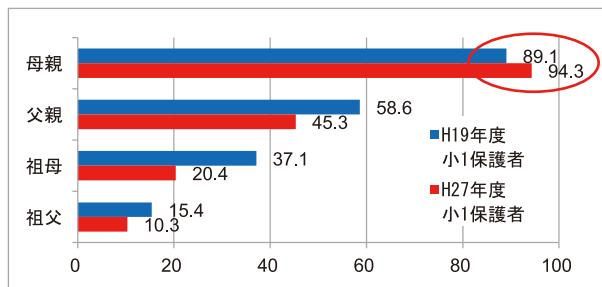
当該学年	配付数 ※各校1組	回収数	回収率 ※回収数／配付数	回答者の属性
小学1年 保護者	596人	563人	94.5%	回答者の93.4%が母親
中学1年 保護者	334人	325人	97.3%	回答者の92.4%が母親
中学1年 生徒	334人	331人	99.1%	

3 調査結果

(1) 子育てについて

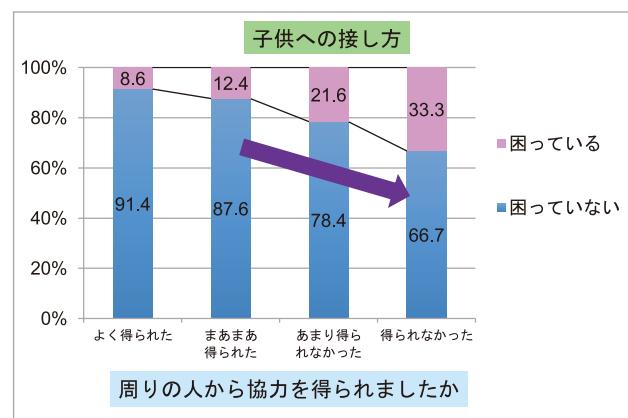
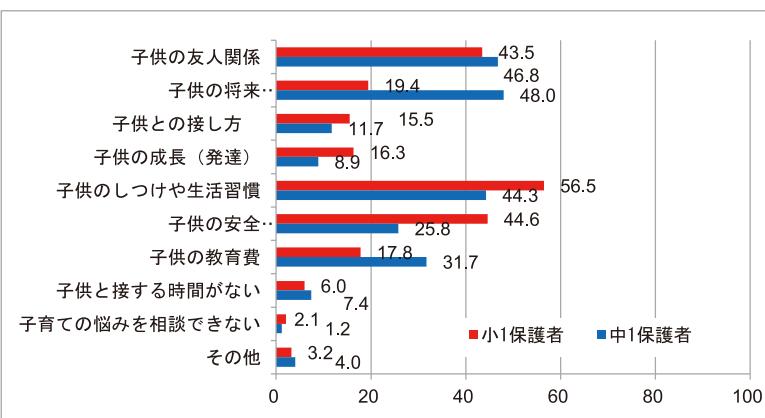
子育ての主な担い手～小学1年・中学1年保護者～

子育ての主な担い手は、19年度に比べ、母親の割合が増えているのに対し、父親、祖母、祖父は減少しています。また、子育てへの協力の有無について「協力を得られた・まあまあ得られた」という肯定的な回答をした保護者も減少していました。回答者の90%以上が母親であること等から考えると、子育てに関する母親の負担感が増しているといえそうです。



子育ての不安～小学1年・中学1年保護者～

小・中学校ともに、「子供の友人関係」についての保護者の不安は、45%前後にのぼりました。小学校では、「しつけや生活習慣」、「安全」の項目が高くなっています。「安全」については、19年度に比べ、16.2P増加していました。中学校では、小学校に比べ「将来」や「教育費」の項目が大きく増加していました。将来や安全についての不安は、現在の社会を反映していると考えられます。また、子育ての協力を得られにくかった保護者が、子供への接し方に悩んでいる様子がうかがえました。教育費の不安についても同様の傾向が見られました。



【傾向】

- 家庭の孤立化
- 保護者から見えにくいことに対する不安
- 進路選択・経済的な不安

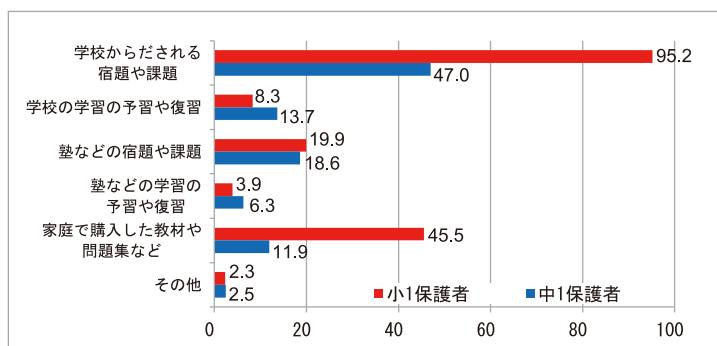
【支援として】

- ◎子供や安全に関わる情報の提供・共有
- ◎小・中学校を通して、保護者の子育ての不安を把握

(2) 家庭学習について

家庭学習の内容～小学1年・中学1年保護者～

家庭学習で取り組むものとして、小・中学校ともに学校から出される宿題や課題が一番多くなっています。また、中学1年生徒の調査から、保護者の学習への関心が高いほど、宿題をやり遂げ期限に間に合うように提出するという、課題提出への意識が高い傾向が見られました。佐倉市学習状況調査から、宿題を最後までやり遂げる習慣がある児童生徒とそうでない児童生徒では、平均得点に大きな差が生まれています。学力向上に向けて大切なことの一つは、宿題や課題を最後までやり遂げる習慣を身に付けることだといえそうです。



【傾向】

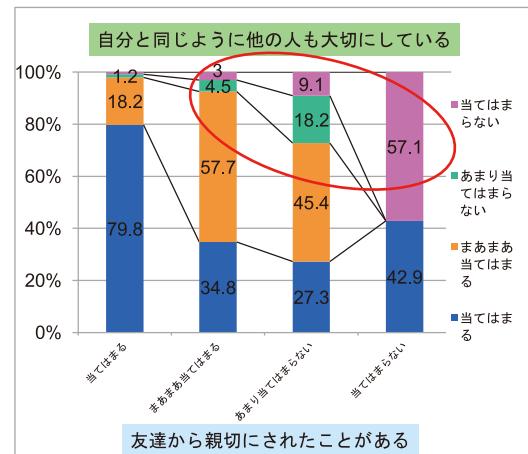
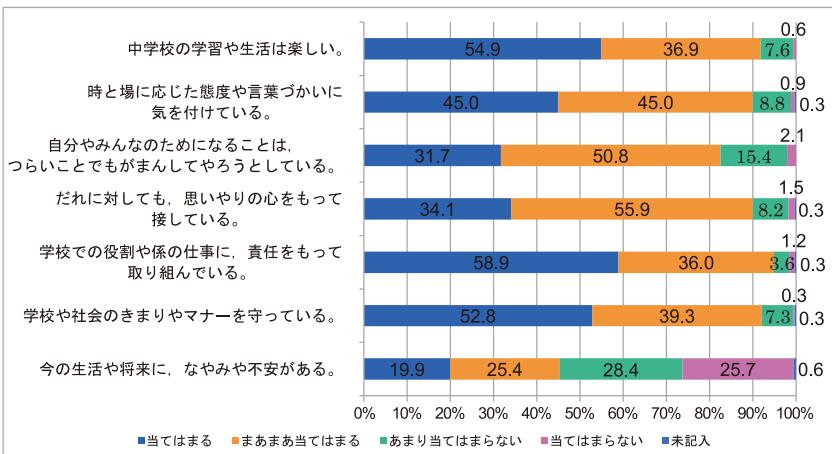
- 学校の宿題・課題の取組が多い。
- 保護者の関心の高さが課題提出意識に影響
- 宿題をやり遂げている生徒は平均得点が高い。

【支援として】

- ◎家庭 → 子供の学習に関心をもつ。
- ◎学校 → 計画的に宿題や課題を出す。
- ◎宿題・課題を最後までやり遂げる支援・指導

(3) 生徒の実態について

自分自身のこと～中学1年生徒～



90%以上の生徒が学校を「楽しい・まあまあ楽しい」と感じています。その他項目についても、80%以上の生徒が、中学校生活について肯定的な回答をしていました。しかし、約45%の生徒が、今の生活や将来に悩みや不安を抱えていました。他の調査項目から、悩みを相談できる友達がいる生徒より、相談できる大人のいる生徒の方が、悩みや不安が少ない傾向が見られました。また、友達から親切にされた経験がある生徒は、他の人のことも大切にしている傾向が見られました。同様に、困っている友達に自分から声をかけようとしている、悩みごとを相談できる友達が多い、という結果も出ています。

【傾向】

- 学校を楽しいと感じている生徒が多い。
- 相談できる大人がいる生徒は悩みや不安が少ない。
- 友達に親切にされた経験があると他の人も大切にしようとする。

【支援として】

- ◎友達とよいコミュニケーションがとれる学習や活動
- ◎子供に関心をもち、信頼できる身近な大人の存在

4 今後の支援のまとめ

調査を通し、浮かび上がってきたキーワードは「コミュニケーション」です。他の調査項目の「保護者が子供に期待すること」の回答では、小学校・中学校ともに、「人とうまくコミュニケーションが取れること」が一番多く挙げられていました。子供を育していく上で、家庭だけでなく、学校、行政、地域でコミュニケーションの場をつくること、コミュニケーションを楽しむことが、今後の課題となってくると考えられます。



【第4報告】適応指導教室の取組と道徳教材の活用について

佐倉市適応指導教室における居場所づくりと学校復帰支援

【居場所づくり】

- ①安心して落ち着ける環境

佐倉教室

部屋が3つ 一人で使用が可能
人と関わることが苦手な子も落ち着ける

志津教室

教室程度の部屋が一つ 自然と関わり合いが増える
学習でつまずいた時、すぐに対応できる

- ②学習以外の様々な活動

読書活動



運動



創作活動



心の栄養
体を動かす心地よさ
満足感・達成感

心も体も元気に！

- ③交流シフト

- 児童・生徒の個性等について共通理解
- 有効な支援について、全員で考える

相談員全員で見守り、適切に支援する体制づくり

【学校復帰支援】

- ①学習支援

学習教材



個別支援



資料集・問題集
好学チャレンジ

教科指導・定期試験
面接・作文練習

苦手意識・不安の解消
学力の向上・進路指導

- ②校外学習・調理実習



調理実習

体験学習・施設見学・徒步遠足

仲間との関わり合い
社会性を身に付ける

- ③学校訪問
- ④保護者面談

- 情報交換、支援の方向性について共通理解
- 相談員・担任・保護者の願いや考えを共有

一人一人に合った具体的かつタイムリーな支援

佐倉を素材とした道徳教材の開発と活用

【新たな道徳教材】

小学校

- 『わたしの町さくら』
- 『まっさきのケヤキ』
- 『佐倉こどもかるた』
- 『おじいちゃんのチューリップ』

中学校

- 『町への想い』



佐倉学道德副読本検討委員会 H26~27

現地取材、読み物資料・指導案等の作成、授業実践

佐倉の歴史
自然
文化
人々の思い

ふるさと佐倉への愛着
伝統を受け継ぎ守って
いこうとする心情

編集後記

現代社会においては、核家族化や貧困家庭の増加それに伴う不登校児童生徒の増加など、難しい教育課題が山積しています。また、平成28年4月から障害者差別解消法が施行されるなど、教育を取り巻く環境も日々変化しています。今回のセンターだよりは「佐倉市教育センター等報告会」での報告を特集しました。教育センターの取組を、各学校における実践に少しでも役立てていただけると幸いです。